

くという精神で業務を行っており、「治療あるところに薬剤師あり」として、病棟だけでなく、各部署にも顔を出している」と現状を紹介した。

林昌洋氏（虎の門病院薬剤部）は、ワルファリンを例に医療の個別化、効率化について、院内のプロトコール作成に薬剤師が関わっていることを紹介。「適正使用が特に重要となる医薬品や、安全性の面で注意を要する医薬品は、薬剤師が主体性をもって体内動態や治療反応性を解析し、共同のプロトコールを作成していくことが重要。それを院内で共有していくことで、極めて有効・安全で効率的な薬物療法を提供することにつながる」と話した。

## チーム医療参画が焦点 主体性ある取り組みを

報の提供を電子カルテに盛り込んだ。このほか、癌化学療法でのプロトコール管理、レジメン作成から処方オーダーまで運用を図っているという。

病院薬剤師の業務革新として、甲斐純子氏（蘇生会総合病院薬剤部）が、院内で薬剤師が医薬品の安全性確保や、質の高い薬物療法への参画を通じ、医師の負担軽減に貢献している例を紹介した。

同病院では、昨夏から導入した電子カルテの構築に薬剤師が関与し、医師が処方しやすい画面の構築や、診療に役立つ情